

独自に神鬼を認識する

To ascertain the god or soul independently and with self-reliance

孟 志 鵬 * 山 口 隆 介

聖泉大学学部生 *

Meng Zhipeng * Yamaguchi Ryusuke

*Student of Seisen University **

要 旨

(孟)なろうとすれば、イエスになれるのではないだろうか。自分の考えをもっているのに、なぜいつの間にかそれを捨てて、人の口真似ばかりしているのだろうか。本稿では、神鬼の説について、私の見方を述べながら、考え方を啓発したいと思う。教会または宗教を考え直させて、認識し直させるのである。すなわち、ある物事について、真理は一つしかないが、真理に対する表現およびそれを追究する理論はさまざまあるのである。そして、それらはすべてが真理に近づくための試みである。教会の教義もその一つに過ぎなく、決して真理そのものではない。今一度見直される必要も当然である。

(山口)山口としては、キリストはただ一人であると信じている。しかし、魂のうちにキリストを生むこと、これはすべての信者の務めである。孟志鵬氏は山口のゼミ生であり、その思想は山口とは必ずしも一致しないが、本稿で氏は、あらかじめ用意された組織宗教的な枠を超え、自ら考えることを強く勧める。本稿自体が、彼の *selbst denken* すなわち自ら考えることの成果である。

Key Word : 神鬼 非神論 未来への記憶

1. 弁証的に教会の神鬼の説を認識する

1.1 現在から昔に戻る

この世界には空間と時間が存在している。そして、空間も二次元、三次元、N次元の空間、広がっている空間、縮まっている空間、それに混雑の空間に分かれていて、時間も前向きの時間、後ろ向きの時間、それに両方向の時間に分かれているかもしれない。

この世界には実在して、だが我々人間が既存の条件で解明できない物事があると仮定し、

さらに、我々人間が今まさに、組織宗教出現前の時代に生きているとも仮定すれば、これらの物事に出会って得た最初のイメージはきっと神鬼¹ではないだろう。あなたはさぞその不思議や恐怖に驚いて、宗教の組織を通さないまま、それらの物事が一体何なのかを自分で考えることだろう。例えば、キリスト教の場合、こんな時には、もしあなたがイエスであるとしたら、これらの物事についてのあなたの考えこそが聖書になるわけである。しかし、当然、あなたと同じように、自分の考えを持っている人も大勢いるはずである。ただ彼らの考えは伝播されておらず、残っていないだけである。

だから、聖書というものはただの誰かの考え方の集合で、理論化されたものである。彼または彼らは自分の理論に基づいて、教会という組織を作って、民衆に神鬼の説を宣伝し始めた。きめ細かい論述だったため、信者もますます多くなってきただけのことである。

1.2 教会だけ信じる危険

人間社会の発達にとっては、教会の役割は欠かすことができないとも言える。例えば、困窮の中にある人たちの信仰の問題を解決したり、社会道徳を築くのに役立ったりする。ただし、教会の利点がその理論から生まれるとともに、教会の弊害もその理論から生まれる。「天動説」、「禁欲苦行」などの主義は人間社会の発達を妨げたのではないか。民衆の自由、科学の進歩、経済の発展に悪い影響を与えてきた。だからこそ、後の宗教改革が起こったのである。

宗教改革のおかげで、キリスト教の世俗生活の側面の弊害が、まだ残存しているとはいえ、少なくなってきた。そして、多くの信者はキリスト教が世界中で一番完璧で先進的で、ファッションブルな宗教だと思って信じている。今現在ますます多くの人たちはどの教会、教会のどの派を信じれば、立派になれるか、信仰がある人と呼ばれるか、思想が正しいと言われるかだけに関心を持っている。もちろん、その他の教会、例えば、イスラム教は多くの悪習や束縛が残って、そして、常にどこかの人に利用されてテロ事件などを起こすが、本質的には、どの教会の教義も同じだろう。イスラム教の教義も民衆に犯罪を教えないだろう。もしキリスト教が唯一正しい教会なら、ほかの教会は正しくなくなる。同じ道理で、キリスト教も既に正しくなくなった。

そればかりか、人々は神鬼ではなくて教会を信じる傾向がある。神鬼は一体なんのイメージなのかはどうでもいい、教会がどう言っているかに従って、彼らは信じている。ただ教会の言い方だけ信じていると言っても言い過ぎではない。

また、教会を信じるのは信仰がある証拠で、信仰は教会を信じることに等しくされて、一つの概念になってしまった。だから、教会こそ信仰だ。神鬼のことではない、自分の本音でもない。

1.3 神鬼の説も多くの観点の一つ

歴史的な慣性のため、人々はいつも教会だけを通して、その未知の物事を認識している。しかも、教会が出した定義はその神鬼の説である。だから、人々はその未知の物事が神鬼だとばかり思っている。実際に、普通の人間だけではなく、今の研究者もそういう慣性を持っている。宗教研究者は大勢いるが、直接にいわゆる神鬼という未知の物事を研究する研究者は全くいないようだ。なにかおかしくないだろうか。研究の対象は神鬼なら、直接に神鬼に手をつければいいのに。第二者の描写を通して、第一者の顔を想像してどうする。もちろん、一部の研究者は本来、研究の対象を神鬼としておらず、神鬼が実在するかどうかはもともと関係ない。しかし、この時、宗教研究者というよりむしろ、宗教教義の整理人または社会現象の研究者²と呼ぶ方がいいのではないか。神鬼を信じる気持ちを持ちながら宗教教義ばかり研究しては何だか怪しい。また、もし彼らが一生かかって研究している教義が本来誤ったものであれば、もっとおかしくなるのではないか。この時代には教義整理人はもう大勢いるが、神鬼と呼ばれる未知のものそのものの研究者は著しく不足している。宗教の教義はそもそも一派の言論で、歴史の限界性があるため、神鬼の説になってしまったにすぎない。しかし、その中から抜け出さなければ、永遠に新しい発見はない。教会の教義だけではなく、ほかの学説も同様だ。参考書とするだけならいいが、真理として研究すればあなたの研究境界もそれまでだ。ただの職人だ、真理を求める研究者とは言えないだろう。

つまり、神鬼という観点はただ教会側のその未知の物事についての考え方だけである。もし教会の観点に沿って考え続ければ、その未知の物事についてずっとひとつの観点しかない。だから、既存の観点から抜け出して、独自に考え直して、研究し直さなければならない。そうでなければ、そういう問題について何も進展はない。永遠にいわゆる神様と魂に出会うことはできない。

この未知の物事に対して、一人ひとり違う見方があるとは最初にすでに述べた。あなたが教会を信じるのも、この教会の言い方があなたの見方に合致すると思った結果のはずで

ある。とにかく、結局はあなたがそう思うべきであった。あなたの考えは正しいかどうか分からないが、あなた自身で考えることこそ最重要の点になる。もちろん、あなたが教会を信じないのもあなたの見方が間違いであるということの意味しない。要するに、教会の言い方は評論の標準ではない。

宗教改革は世間に合っていない部分だけを除いてしまった。宗教の根本としての神鬼の説は除いていない。なぜかという、神鬼の説あつての宗教、神鬼がなければ、宗教もない。また、一番重要なのは、神鬼の中の神様は道徳、正義、理想、善悪などの化身であり、人間の信仰を支えている。そして、魂は人間が死に直面するときの自分への慰めかもしれない。これこそ教会の神鬼の説の意義の所在である。多分またこのためかもしれないが、神鬼が一体何者かを探知するより、人々は神鬼そのままを信じるほうが好きだ。だが、世間に悪くないのは正しいということの意味しない。正しいは正しい、間違いは間違いであつて、感情によって見方を差別してはならない。

1.4 今こそ検討し直すとき

キリスト教が始まってからもう二千年以上も経った。改めてこの物事を検討することも必要になるだろう。現代人はいつも自分の思想がどれだけ開放的で、先端的かを誇っているが、この問題について、全く二千年前と違いはない。今こそ改変の時だ。自由の環境もあるし、先端的な科学技術もあるのだから。多分これらの未知の物事はほんとうに教会が言ったほどではないかもしれない。多分人間の創造者ではなく、人間が死んだあとの変化物でもない。精神的なものさすではない。ただの人間のように別の空間または時間内に生きている生物、たまに人間の世界と交わるだけかもしれない。また、彼らにとっては、我々人間も正に彼らの世界の神様と見なされている存在かもしれない。それだから、私としては、その神鬼と言われる未知の物事が精神的なものではないと思っている。人間あつての魂と言われるので、人間の誕生や存在とともに誕生しようが、人間が誕生したときに人間の体に入ろうが、そして、人間が死んだあとに変わったものであろうが、元々は人間がなければ、魂も生み出されないということだ。結局は精神的なものではなく、物質性を持っているのである。私はこのものが両方向時間内の生き物だと思っている。ただ、人間の世界にいて、人間の体に寄生していなければならない。このものが一体何者なのか、次で、私の見方を伝えさせていただく。

2. 魂といわれる存在についての発想

2.1 人間は蛙みたい

私たちの見ている世界はただ私たちの知っている世界だけであり、そして、この知っている世界はその本当の世界ではない。蛙が静止の物体が見えないと同じように、人間にも見えないが実際に存在している物事があると想像してほしい。今までの何千年、さらに現在でも、人々も魂の存在を論争している。魂の存在を信じている人は客観的唯心論者に区分される。信じていない人は客観的対象上の唯物論者に区分される。しかし、もし魂が物質的であればどうなるかということ、誰も考えていないようだ。

2.2 未来への記憶は実在するかもしれない

私から見れば、魂は物質的である。魂は時間内の生物、人間は空間内の生物である。時間と空間とは性質が相互に異なり、一体でもない。したがって、現代の一番先進的な計器を利用して、人間は魂のことが見えない。時空は平行に存在している二つの世界であって、普通に言われる時間は本当の時間ではなく、ただの人工の時間にすぎない。時空の間には“膜”が実在するかもしれない。そして、魂はこの膜を見抜くことができ、しかも、突き抜けることもできる。それに対して、人間はひとつもできない。時間からの魂は空間で生きていくには人間の身体と結合しなければならない。そして、ひとつの体にはひとつの魂しか載せられない（寄生といったほうがよいと思う）。すなわち、魂は人間が生まれてくるとともに人間の体に「進駐」するのである（もちろん、後で入ることもある。しかし、魂は必ずひとつしかいない。中学校のとき、奇妙な事件のインタビューを見たことがあった。主人公の田舎の婦人が死んだ後に、生き返ってまるで別人の人格を持ったということだった。この婦人は本来教育をほとんど受けていなかったが、生き返ってからは、知的な人格とほかの人の記憶を持つようになった。私の考えでは、この婦人が“死んだ”時に、元の魂が人体から離れた、しかし、人間としての婦人はほんとうに死んだわけではなく、ちょうどその時、ほかの人間の体から離脱したばかりの魂にぶつかられて結合してしまったのだろう）。時空の性質の違いにより、非空間内の生物の魂は、人体に入った後、最大制限で束縛されて人体と切り離れることはできない。普通に言われる意識は脳の機能と魂が共同的に組み合わせさせたものである。それと同時に、脳と魂の間でも互いに働きかける。まず、魂は脳の発展とともに発展していく。脳が死ぬ前に新しい内包と高度を獲得する。次に、脳の発展も魂に影響を与えられる。例えば、王安石の「傷仲永」には“仲永が五歳

の時、まだ筆記具というものを知らなかったのに、突然泣いて筆記具を欲しがり、父はいぶかしんだが、近所の人に筆記具を借りて、仲永に与えた。するとそのまま一篇四句の詩を書き、そして自分で署名した”と書いてある。これは脳の機能ではなくて、魂の前世あるいは前の宿主の記憶である。このような例はほかにもいっぱいある。また例えば、習っていないことを、すでに身に付けていると感じることもよくある。経験していない物事や人にもデジャビュする。先ほどの例が前世への記憶というなら、この例は未来への記憶ということになるだろう。これはすべて魂が時間内の生物だから起きることである。

もちろん、脳への影響の強さは魂の活動性のいかにかかわっている。前に挙げた例はすべて魂の活動性が弱い場合である。魂の活動性が強い場合に当たると、別の状況になるわけだ。活動性が強いときには、幽霊を見ること、未来を見ること、前世を見ること、それと脳内対話することもできる。本当の話を挙げると、筆者(孟)の妹は幽霊のことが見え、近い未来のことも見える。彼女が幽霊を見られるのは彼女の体内の魂の活動性が強いからだと思う。彼女が見える幽霊は実に時間内の魂、彼女の幽霊が見える目も人間ではなく、体内の魂の目だと思う。それに、彼女が見える未来もその体内の魂が見たものである(例：彼女は、クラスメートが死んだ夢を見た、果たして、その友達はその後しばらくして交通事故で死亡した。また、彼女が村の一人が家で安静している夢を見た、果たして、その人は坑内作業で怪我した。ほかにもいろいろなことがある)。

筆者(孟)の父も幽霊が見える。さらに、彼もよく前世の情景を見た。これが活動性の強い魂の前世または前の宿主への記憶の表現だと思う。そして、彼は脳内対話した経験もあった。脳内対話というのは脳の中に二つの声あるいは考えがあること。それが魂と脳の機能との共同稼働による結果だと思う。

2.3 生きているのか死んでいるのか

魂は人体が死んだ後、また独立に存在し、発展する。ただ、宿主を失い、空間内にいたときの記憶を持って時間内に戻らなければならない。このとき、時空の間に存在している膜を通して、空間内の身寄りを眺められるだけだ。もしたまたま、空間内の身寄りの体内の魂の活動性が強いなら、魂の目を通して時間内の身寄りが見えると私は想像している(うちの妹は亡くなった母を見たことがあった。これが見合った二つの魂かも知れない)

人体が死ぬとともに、脳の機能も一緒に死ぬが、魂としての意識はまだ生きている。ただ、このとき、君がまだ生きているのか、もう死んでいるのか、わからない。それは君が

魂そのものかまたは人間か、わからないからである。

3. 追記

- ① 直接に神鬼に交流するのは宗教改革の主張。私の主張は独自に神鬼を認識するという
ことであり、そして、無神論ではなく、非神論である³。
- ② もし宗教がなければ、神鬼にかこつける民族、部落または地区間の衝突、みぞなどがある程度軽くなるかも知れない。世界も新しい融合の時代を迎えるわけである。せめて“聖戦”という嘘の争いや殺戮だけでもなくなるだろう。それから、宗教は悪しき役割とともに歴史の舞台から退出する。そして、そのよき役割は別の信念(たとえば歴史的な使命感)が代替して人々の生活を支える。
- ③ 時間の遅速感が魂の感覚かもしれない。
- ④ 時空は支えあっている、宇宙に同属する存在だと思う。
- ⑤ 未来への記憶の発生には二つの原因があるかもしれない。ひとつは時間内の生物としての魂の特性のおかげであり、いまひとつは、瞬間発生した後ろ向きの時間が脳に与えた印である。

¹ 神鬼という用語の使用に関しては、筆者間では一致を見ていない。筆者の1人(孟)は、この語を未知のもの(の)の代用語として用いている。いっぽう筆者のもう1人(山口)は、神鬼をキリストなどに適応することは当然認めていない。本稿は非神論的な議論を展開し、この神鬼という概念を批判するものである。

² 自分の感情が宗教に籠もっていないという意味で社会現象の研究者という表現を用いている。このような立場にとって宗教は単なる社会現象にすぎない。

³ 無神論が、筆者の1人(孟)のいうところの神鬼の存在そのものを否定するのに対し、非神論は、存在を認めた上で、それを「神」とすることを否定する。